

奈良に古くから伝わるむかしばなしを紹介します。



絵から ぬけてた牛



神波多神社の本殿
(県指定文化財・写真右)と牛の絵

神波多神社は「延喜式」(平安時代)に見える古社。疫病を鎮める神の牛頭天王を祀り、「波多の天王」として信仰を集めた。16世紀に兵火で焼失。17世紀中ごろに再建。平成8年に、本殿の解体修理が完成した。牛の絵は、本殿裏の板壁に復元模写されている。



文・山崎しげ子



神波多神社の例祭(天王祭り)10月第4土曜

前日の宵宮に始まり、祭当日は、御神霊を遷した神輿が、道化役の先導で西へ約500mの牛の宮(お旅所)まで渡御。笛、太鼓、さらの音が響き、田楽、神楽(獅子舞)が奉納され、大いに賑わう。

奈良県の北東、三重県に隣接する山辺郡山添村中峰山。おだやかな山並みに囲まれた静かな里である。昔、この村にひとりの絵師がふらりとやってきた。粗末な身なりで、持っているものは絵筆の人った包みだけ。絵師はその夜の宿を探していたが、村人は皆用心して戸を閉ざしていた。困った絵師がとぼとぼと歩いていくと、「ゴーン、ゴーン」と、寺の鐘の音が聞こえた。「そうだ。今夜は、ひとつ、あのお寺に泊めてもらおう」と、さっそくその寺を訪れた。お寺の和尚さんは快く招き入れ、男が旅の絵師と聞くと、「どうじゃな、ここに二、三日泊まって、絵の一枚も描いてくださらないか」といった。

絵師はこの山寺に泊まることになった。だが、二日たつても三日たつても、十日たつても、いつこうに絵を描こうとしない。さすが村人も「あれは、偽者かもしれない」と噂しあった。ところが、ある晩のこと、絵師は近くの神波多神社の白壁に、絵筆を握るや一気に描きあげた。それは、たくましい見事な牛の絵だった。そして翌朝、絵師は静かに寺を去った。やがて秋になり、稲刈りが始まった。ところが、不思議なことに、稲は刈った後、稲架に架けて乾かすのだが、その稲が毎晩盗まれるのだ。村は大騒ぎとなり、寝ずの番をして稲盗人を捕まえることにした。さて、いよいよ、真夜中。どこからかゴソゴソと音がし、黒い影が見えた。

村人が近づくと、黒い影はさつと逃げ、神社の境内に消えた。そして村人は稲盗人の正体を見て驚いた。何とあの絵師が白壁に描いた絵の牛だった。「うーん、これは困った」。村人は相談し、絵師を皆で探すことにした。やつのことで絵師を見つけ出し、「あなたの力であの牛を止めてくれんか」と頼んだ。絵師は、神社に戻り、さつそく、絵の牛のそばに松の木を一本描き、さらに、太い綱で牛が松につながれているかのように描きなおした。それからというものの、田の稲が荒らされることはなくなった。めでたし、めでたし。その牛の絵は、実は、今も神波多神社に残っている。

物語の場所を訪れよう



「神波多神社」(山添村中峰山)へは...
車で名阪国道五月橋ICから南東へ約1km。

山添村教育委員会 ☎0743-85-0049